

第2章 「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の育成

「豊かな心の育成」（芸術教育の充実）

芸術教育は、表現や鑑賞の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、豊かな情操を養うことをねらいとしており、人格形成の基礎として重要な役割をもつ。

1 芸術教育に関する指導の充実

平成28年12月の中央教育審議会答申では、芸術を学ぶことについて、次のように述べられている。

グローバル化する社会の中で、子供たちには、芸術を学ぶことを通じて感性等を育み、日本文化を理解して継承したり、異文化を理解し多様な人々と協働したりできるようになることが求められている。このため、音楽や美術、工芸、書の伝統や文化を尊重し、実感的な理解を深めていくことが重要である。

また、芸術系教科・科目における教育内容の改善・充実について、次のように述べられている。

芸術系教科・科目においては、子供たちが、世の中にある音楽、美術、工芸、書道等と自分との関わりを築いていけるようになることを大切にしている。しかし、授業の中で、なぜそれを学ばなければならないのかということを実感することについては、教員の意識としても、子供たちの意識としても弱いのではないかという指摘もなされている。このため、授業で学習したことが、これからの自分たちの生活の中で生きてくるといふ実感を持てるよう、指導の改善・充実を図ることが求められる。

2 各学校の創意工夫

学校における芸術教育では、生活や社会の中の芸術の働きや芸術文化と豊かに関わり、生涯にわたって芸術文化を愛好する心情をもてるようにする必要がある。

各学校では、児童生徒一人一人が個性的・創造的な学習活動を行うことができるよう、創意工夫を生かした教育活動を展開することが大切である。

（各学校の創意工夫の例）

- 美術館等の文化施設、社会教育施設、地域の文化財等の活用や連携
- 実物の美術や書の作品、専門家による演奏の直接的な鑑賞
- 作家や学芸員、音楽団体等、専門家の経験豊かな人材の活用や連携
- 総合的な学習の時間や学校行事、地域に関係する行事などとの関連
- 我が国や郷土の伝統的な文化に関する指導の充実
- 専門家等の経験豊かな人材の活用
- 芸術と生活や社会との関わりを実感できる指導の充実
- 随時鑑賞に親しむことができるような校内環境の整備
- 感じたことや考えたことを友だちと語り合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりする場の設定 など

(1) 芸術と生活や社会との関わりを実感できる指導の充実<小学校 音楽科>

事業名 令和元年度オーケストラ鑑賞教室～くれリンクアップコンサート～【呉市】

ニューヨークのカーネギーホールで開発された小学生向けの音楽教育プログラムを基にして企画・実施されている。音楽科の授業と演奏会を連動させ、学習の集大成として、演奏会当日、小学校第5学年の児童が一堂に会し、授業で学習した楽曲を、広島交響楽団による生演奏で聴いたり一緒に演奏したりする。音楽科の学習内容と学校外の音楽活動とのつながりを意識できるようにし、生活や社会の中の音や音楽と主体的に関わっていくことにつなげている。

主な活動内容（演奏曲）

- 演奏に合わせて歌う（Come to Play, ふるさと）
- 鑑賞する（ハンガリー舞曲第5番）
- リコーダーと一緒に演奏する（美しく青きドナウ） 他



演奏に合わせて歌っている様子



一緒にリコーダーを演奏している様子

取組の工夫

- 教師用指導資料及び児童用テキストの作成と活用
- コンサートに向けた教員を対象とした音楽研修会の実施



教師用指導資料・児童用テキスト



教員対象の音楽研修会

(2) 感じたことや考えたことを友だちと語り合う場の設定<中学校 美術科>

題材名「名画のささやきを聞こう！」【東広島市立西条中学校 第3学年】

学習の流れ（全3時間）

- ① 作品A（木村武山「羽衣」）について、対話による鑑賞を通して、作者の心情や意図、表現の工夫等を感じ取り交流した後、グループごとに作品の魅力についてポートフォリオに整理して交流し合う。
- ② 作品B（マルク・シャガール「町の上で、ヴィテブスク」）の鑑賞を、①と同様に行う。
- ③ 作品Aと作品Bを比較鑑賞し、二つの作品の新たなよさや美しさを捉える。

指導の工夫

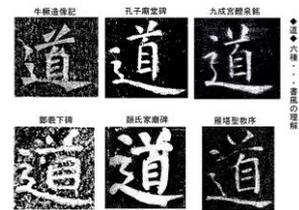
本題材では、共通のモチーフをもつ二つの作品を鑑賞している。授業の中心を作品Bの鑑賞とし、作品Aよりもモチーフや造形要素等の情報量が多く、物語性の強い作品を選び、より深く考えられる学習の流れにしている。また、作品Aでは自由にイメージを広げて共有し、作品Bでは自分の経験や考えと照らし合わせて思考を深めていくが、その後、二つの作品を比較鑑賞することで、相違点や共通点を見付け、新たな価値に気付くことができるようにしている。さらに、題材全体の活動を通して、生徒の学習過程、思考の流れに沿った一枚ポートフォリオを活用し、思考を深めたり、生徒自身が学習全体を振り返ったりすることができるようにしている。

(3) 感じたことや考えたことを友達と語り合う場の設定<高等学校 芸術科（書道）>

単元名「漢字の書—文字をイメージする—」【広島県立福山誠之館高等学校 第1学年】

学習の流れ（全6時間）

- ① 書風の異なる「道」を比較して、それぞれから受けるイメージの違いについて考える。
- ② 各自が意図する作品の構想を決め、意図に基づいた「道」のイメージを表す作品を制作する。
- ③ 自己評価、相互評価を踏まえながら、清書作品と制作意図を書く。
- ④ 各自の作品紹介を行う。



指導の工夫

意図に基づいた構想を行うことができるよう、それぞれの古典のイメージと制作意図を生徒自身に説明できるようにさせる場が設定されている。また、評価活動を効果的に取り入れることにより、表現と鑑賞が往還する学習過程の中で、表現要素の理解や多様な表現効果の美しさについて、生徒の思考力・判断力・表現力を育成することができる実践となっている。

